谷崎潤一郎と『パルムの僧院』

青　木　謙　三

I　はじめに[1)]

谷崎は，『パルムの僧院』[2)]について大正十五年九月の佐藤春夫宛書簡〔25〕[3)]で「英訳 Charterhouse of Parma を読了した，二冊で六百ページほどある実に驚くべき作品だ，これが今迄日本で評判にならなかつたのが不思議だが誰かが翻訳すれバいいと思つてゐる」と感心し，昭和二年一月の濱本浩宛書簡〔25〕で「スタンダアルのあの本の英訳には二種あつて〔…〕後のはチャアタアハウスと英訳してあります，僕の持つてゐるのは後者で，モントクリエフと云ふ人の訳で，昨年倫敦で出版されました」と記す。モントクリエフはモンクリエフ Moncrieff の誤りだが，同二年の『饒舌録』〔20〕では「「大菩薩峠」は次第に気分小説になつて来たので，筋が冗漫になり，組み立ての緊密さが欠けてゐるのは是非もないが，組み立てと云ふ点で近頃私が驚いたのは，スタンダールの "The Charterhouse of Parma" である。此の小説は英訳で五百ページからある。日本語にしたら千ページにもなる長篇で，ワーテルローの戦争から伊太利の公国を舞台にしたものだが，話の筋は複雑纒綿，波瀾重畳を極めてゐて寸毫も長いと云ふ気を起させない。寧ろ短か過ぎる感があるほど圧搾されてゐる。書き出しからワーテルローの戦場迄が幾らか無味乾燥な嫌ひはあるが，しかし元来スタンダールと云ふ人はわざと乾燥な，要約的な書き方をする人で，それが此の小説では，だんだん読んで行くうちに却つて緊張味を帯び，異常な成功を収めてゐる。〔…〕殆ど一ページ一ページに百ページもの内容を充実させてあるのである。だから寸分の隙もなく無駄もない。葛藤に富んだ大事件の肉を削り，膏を漉し，血を絞り取つてしまつて，ただその骨格だけを残

したやうな感じである。而もその中に出て来る王侯宰相才子佳人の性格は皆悉く驚嘆すべき鮮明さを以て浮き上つて居るのだから偉い。主人公のファブリチオ[4]は云ふ迄もないが，宰相のモスカ伯爵，此れが実によく描けてゐる。仮にも一小国の宰相を捉へて，その幅のある大きな性格，機略，聡明，熱情，嫉妬，恋愛等の複雑なる種々相を書き分けることは大変な仕事だ。然るにそれが実に簡結に，所に依つては十行二十行の描写でさつさつと片付けられて行く。筋も随分有り得べからざるやうな偶然事が，層層塁塁と積み重なり，クライマツクスの上にもクライマツクスが盛り上つて行くのだが，かう云ふ場合，余計な色彩や形容があると何だか嘘らしく思へるのに，骨組みだけで記録して行くから，却つて現実味を覚える。〔…〕／〔…〕此れ程の作家のものが，「赤と黒」と「恋愛論」を除いて，外に一向日本へ紹介されてゐないのは不思議なことだ。矢張かう云ふ筋の面白いものは小説の邪道だと思はれてゐるせゐであらうか。彼の作品を読んだ後で直ぐにキングスレーの「ハイペシア」を読みかけたが，とても下らなく，無駄があつてふわふわしてゐて読む気になれない」と記し，人物描写もさりながら筋が面白く何よりも無駄がなく緊密に組み立てられているとの讃辞を呈し，ワーテルローの戦いまでの「無味乾燥」すら，「乾燥」を「要約」と巧みにすりかえている。

とはいえ，この作品に対し緊密な組み立てを称揚する谷崎の態度にはいささか問題があろう。谷崎の読んだ英訳には序文としてバルザックの「ベイル氏論」が付され，そこでは，ワーテルローより前は回想シーンとするべきでありパルムが舞台ゆえデル・ドンゴ父子やミラノの詳細は要らず，主人公が大司教〈正しくは大司教補佐〉となった時点で終わるのが望ましいと述べ，構成上の統一に難があることを示唆する〈The law which governs everything is that of unitiy in composition〉。さらに主人公とクレリアの愛を扱うならば小説のタイトルを変えるほうがよく，かつファブリスに大公父子，公爵夫人，パラなどに劣らぬ偉大な思想をあたえ，周囲を圧倒する感情を授けるべきであって，この作品は短くするか長くするしかないと結論する。またスタンダール研究者として著名なジャン・プレヴォー[5]は，この作にはデル・ドンゴー侯爵

と長男アスカニオ，ファブリスの母と叔母，女優ファウスタと歌手マリエッタなどたがいに分身と解しうる人物が多いと指摘する。したがって類似の状況の反復が見られ，さらに私見ながら，ファウスタの小間使いベッティーナ，伯爵夫人クレリアの知人ゴンゾーなど端役に筆を費やすきらいもある。

谷崎がバルザックの評を読んだか否かは確定しえまいが，かりに読んだならなおのこと『パルムの僧院』に緊密な組み立てを認める反応には疑問が生じる。思うに別の理由が潜んではいまいか[6]。つまりこの長編のなんらかの別の面が谷崎を魅了し，そのために読後感として組み立てが緊密だとの印象を受けたのではないか。女性が多く登場し主人公ファブリスが彼女らに例外なく好かれる点，彼の生活が放浪といいうる点などいくつかほかの理由も推しうるが，この長編の二人の女主人公に谷崎が強く惹かれたことが組み立てを緊密とする印象，あえて言えば実質以上の印象をあたえたのではなかろうか。以下ではこの仮定を女主人公たちの谷崎に及ぼす魅力の考察を通して説得的なものにしたい[7]。

Ⅱ　サンセヴェリーナ公爵夫人

1．彼女には，まず男の首を欲するイメージがある。サロメの母でヨハネの首を欲するヘロディアスにたとえられ「その真にロンバルジア風の顔は，レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた美しいエロディアーデの，逸楽的な微笑と優しい憂愁を思い出させ（15)」る。また夫人は，詩人，医者，盗賊を兼ねる革命家パラがひどく痩せているのに気づく折，画家の「パラジは〔…〕大聖堂に沙漠の聖ヨハネを描いた絵をおさめたばかりだけど，こんな目に描けばよかった（21)」と惜しむ。すなわちヨハネを想うヘロディアスに夫人は連なる。さらに，獄中のファブリスをだしに使い大公が自分を意のままにしようとすれば「はは，古いユーディットの物語だ（16)」と心に決め，敵将ホロフェルネスの首を奪ったユダヤの美女ユーディットと自己を重ねている。

2．夫人には執拗に復讐する背徳的なイメージも見られる。些細な口論がき

っかけで前夫の伯爵を若い軍人らに殺された彼女は，親しくする青年に復讐を頼むが断られる。青年に愛想をつかしはしたものの，青年の自分への愛情を逆に掻き立てたあげく，冷たくあしらって絶望させる（2）。またサンセヴェリーナ邸の貯水池の栓を抜きパルムの町を水浸しにすることは，大公を毒殺する際の夫人からパラへの合図だが，その合図の実行を指示された召使いは「眼を上げ，公爵夫人を見るとこわくなった。彼女は六尺ほど離れた裸の壁をじっと見つめていた。その眼は残忍だったということは認めなければならない〈it must be admitted, her expression was terrible〉(22)」。語り手は評する—「復讐を決意してから，彼女は自分の力を感じた。才知が動くごとに幸福を感じた。イタリア人が復讐に不道徳な喜びを感ずるのは，どうやらこの国民の想像力によるようである（21)」と。

3．前項2と関わろうが高慢な面もある。ファブリスの命乞いに来るだろう夫人を念頭に大公は「あの高慢な美人〈that proud beauty〉もとうとう屈服するわけだ。まったく生意気な独立不羈な様子〈her little airs of independence〉はしゃくにさわった（14)」と溜飲を下げる。一方「ファブリスが敵の手の中にある。私のためにおそらく毒を盛られる」と案じる夫人に関し語り手は「怒り，憤激，大公に対する屈辱感〈the sense of her own inferiority〉が，この高慢な魂〈this proud soul〉をいっぱいにしていた（16)」と，その気位の高さを認める。

4．夫人はまた心から彼女を崇め，その命令に無条件に従う男を持つ。パラの自分への情熱が「あらゆる恋の法則に従って，希望の光を帯びるようになったこと」に気づいた夫人は「彼を森の中へ追い返し，言葉をかけてはいけないと命じ」るが，彼は「即座に完全な従順さ」で命に服する（21)。彼はさらに，大公の毒殺を夫人に指示され「あなたに生き残ることを命じます」と言われる時「公爵夫人が〔…〕命令的な口調でいうのに，すっかり嬉しくなって〔…〕深い喜びに彼の眼は輝いた〈Ferrante was delighted with the tone of au-

thority which the Duchessa adopted with him: his eyes gleamed with a profound joy〉(21)」と描写され，愛する女性に跪拝する様をみせる。

パラのみならず，夫人に惚れ込んでいる若い新大公も夫人に愛情関係における絶対的な主人の資格をみている。宮廷を去ると言い張る夫人に彼は，もしも夫人が出発を思いとどまっていたならと仮定したうえで告げる—「私の心は完全にあなたのものです。永久に私の行動と政府の絶対的な主人となられるのですから〈my heart is all yours, and you would have seen yourself for ever the absolute mistress of my actions as of my government〉(27)」。

かくして，気位が高く復讐欲が強く，愛により男をしたがわせ，その主人となり男のマゾヒズムをみたしうる，生首を欲する女性像が現れる。これは谷崎の嗜好にかなうだろう。

実際，谷崎が感じる首（頭部）への被虐性は，源実朝の斬首を歌舞伎で幼い頃目にして「此の芝居の通りに殺されて首を掻き斬られる光景を想像すると，今迄嘗て経験した事のない快感が〔…〕胸の奥にどよめくのを覚えた」という『饒太郎』（大３〔２〕）の主人公の反応にも，また「法師丸は，その首の境涯が羨ましかつた。〔…〕殺されて，首になつて〔…〕彼女の手に扱はれたい〔…〕//少年は，〔…〕彼女が櫛の峰を以て首の頂辺を打ち叩くとき，自分が叩かれてゐるやうに考へ〔…〕脳が痺れ，体中が顫へるのであつた（『武州公秘話』昭６〔13〕）」という，女に死化粧をほどこされる敵将らの生首を前にした若き武州公の反応にもうかがえる。

くわえて，首に限定されない谷崎の肉体的・精神的マゾヒズム，すなわち女主人を崇拝しかつ奉仕する奴隷への好みは，たとえば，霊公が南子に「今迄私は，奴隷が主に事へるやうに，人間が神を崇めるやうに，お前を愛して居た（『麒麟』明43〔１〕）」という表白，「それでも彼は彼の女を憎むことが出来なかつた。やつぱり彼の女の奴隷となつて，惨忍な，奸譎な女王の足下に自殺をして了ひたかつた」（『捨てられるまで』大３〔２〕）という言辞に看取できよう。

また後年，松子夫人への書簡にも次のように記される—「ほんたうに我がままを仰つしやいます程，昔の御育ちがよく分つて来て，ますます気高く御見えになります，〔…〕かういふご主人様にならたとひ御手討ちにあひましても本望でございます，恋愛といふよりは，もつと献身的な，云はば宗教的な感情に近い崇拝の念が起つて参ります〔…〕西洋の小説には男子の上に君臨する偉い女性が出て参りますが日本に/あなた様のやうな御方がいらつしやらうとは思ひませんでした，/〔…〕此の世に何もこれ以上の望みはございません，〔…〕一生私を御側において，御茶坊主のやうに思し召して御使ひ遊ばして下さいまし，御気に召しませぬ時はどんなにいぢめて下すつても結構でございます[8)]」（昭7　書簡132　根津御奥様宛〔25〕）。

5．夫人はまたフェティシズムの対象であり得る。その白い手へパラは執着し「じつに長いこと綺麗な白い手〈a pair of lovely white hands〉を見たことがなかったのです」と感動し，しばらくして「私は綺麗な着物が好きになってしまったのです。それから白い手も〈I like fine clothes, white hands〉」と繰り返し「彼は公爵夫人の手をじっと見るので，彼女はこわくなった〈He looked at the Duchessa's in such a fashion that fear seized hold of her〉(21)」と記される。

フェティシュの対象は白い手にとどまるまい。公爵夫人の軽やかな，おそらくはちいさな足も例外でなく，パルムへの滞留を交換条件に甥への特赦を得ようと大公に拝謁する夫人の足取りは魅力的である—「このときほど公爵夫人が軽快で美しかったことはなかった。〔…〕その軽く速い足がほとんど絨毯に触れない速さで進むのを見て哀れな侍従武官は気を失わんばかりだった〈Seeing her light and rapid little step scarcely brush the carpet, the poor Aide-de-Camp was on the point of losing his reason altogether〉(14)」[9)]。

谷崎はといえば，白・足・手のフェティシズムが永遠女性としての母親像とともに存在する。別れた恋人への手紙の体裁をとる『アヴェ・マリア』（大12〔8〕）では「フェテイシズムに似た心持でその物に対し〔…〕その奴隷とし

て恰も神に対するやうにそれを崇拝する」習性が人にはそなわるとの話をきっかけに幼少期からの白との経緯を語り手は述べ，「私にはいつもひとつの白があつた」がその白の本体は幼い頃祖父の隠居所の額に収められていた聖母像[10]の肌なので「心のずつと奥〔…〕では〔…〕その像こそほんたうの「白」である」と知っていたと告白する。この記述の前には，ホームレスのロシア人少年を風呂に入れ，その白い肌と石鹸の白さとの調和に感心し「此の児の足はちやうど私の掌の上へ乗つかる程の大きさなのだ〔…〕お前の足がまるで子供のそれのやうにきやしやだつたことが想ひ出される」と偏愛を示すが，少年の足は無論白かろう。またふた月以上経ち手紙を書き継ぐ語り手は，足の不自由なロシア少女の足を少年同様に洗ってやり「私は今，この哀れな肢足の娘――ソフイアの顔を見るにつけても，あのマリアの像が想ひ出されてならない」のである。

よってマリア像の肌の白さと少年と少女の小さく白い足が関連づけられ，かつ白さとともに小さな足へのフェティシズムが表出されている。この「白」へのフェティシズムの谷崎における起源は，彼の母の肌，それも顔よりは足の白い肌と考えられる―「〈母は〉顔ばかりでなく，大腿部の辺の肌が素晴らしく白く肌理が細かだつたので，一緒に風呂に這入つてゐて思はずハッとして見直したこともたびたびであつた。じつと見てゐると白さが一層際立つて来る感じがしたが，ああ云ふ白さは今の人の白さとは違ふ。あの時分の女性は今のやうに外気に触れず体の大部分を衣服で包み，日あたりの悪い，昼も薄暗い深窓に垂れ籠めて暮らしてゐたのでああ云ふ白さになつたのであらうか（『幼少時代』昭30〔17〕）」[11]。

他方マリアは永遠女性と等価であり「西洋の男子はしばしば自分の恋人に聖母マリアの姿を夢み，「永遠女性」の俤を思ひ起こすと云ふ（『恋愛及び色情』昭6〔20〕）」と谷崎が捉えるため，彼が幼かった頃の若い母も白い肌を媒介に永遠女性のイメージを帯び[12]，マリアに似て次のように崇高とされる―「婦人が崇高に見える時――と云ふ題で何か私の考へを云へとのお頼みですが，強ひて云へば古い優れた芸術品の仏像とか，肖像画とかを見た時に一番それを感じ

ます。〔…〕崇高といへば，何かそこに永遠なものが含まれて居べきだと思ひます。私は空想の中で屢々〔…〕多分私が七つか八つの子供だつた頃の，若い美しい〔…〕母の顔を浮かべます。それが私には一番崇高な感じがします（『女の顔』大11〔22〕）」。

さらに足への，それも白いのみならず小さな足へのフェティシズムは，『春琴抄』（昭8〔13〕）での「佐助は〔…〕お師匠様の足はちやうどこの手の上へ載る程であつたと云ひ」などの描写や『夢の浮き橋』（昭34〔18〕）の「父は添水から流れ落ちる水の下まで歩いて行つてビールを冷やした。母も床から足を垂らして，池の水に浸してゐたが，水の中で見る母の足は外で見るよりも美しかつた。母は小柄な人だつたので，小さくて丸つこい，真つ白な摘入のやうな足をしてゐたが，それをじいつと水に浸けたまま，動かさず体中に浸み渡る冷たさを味はつてゐる風であつた。後年私は大人になつてから〔…〕この池の鯉や鮒どもは麩にばかり寄つて来ないで，この美しい足の周囲で戯れたらいいのにと，子供心にもそんなことを思つた」との一節にあきらかだろう。

足とならんで，手も谷崎のフェティシズムの対象でありうる[13]。白ければ可能性はより高い。女性の手については，中国女性に関し「かつて〔…〕世の中で支那婦人の手ほど繊細の美を極めたものはないと感じたが，〔…〕あれが温室の花なら此れ〈恋人あぐりの手〉は野生の嫩草（『青い花』大11〔8〕）」だとの意見や，女首を扱う女の白い手についての次のような記述に認められよう—「法師丸にはその室内の光景が一つ残らず眼に映つた。〔…〕その首をいろいろに扱つてゐる女の手や指が，生気を失つた首の皮膚の色と比較される場合，異様に生き生きと，白く，なまめかしく見えた。彼女たちはそれらの首を動かすのに，〔…〕髪の毛をくるくると幾重にも手首に巻き付ける。さふ云ふ時にその手がへんに美しさを増した（『武州公秘話』昭6〔13〕）」。

かくして，侯爵夫人の小さく白い足を，その白い手とともに谷崎は脳裏に描いたのではあるまいか。

6．加えてサンセヴェリーナ夫人には母への対象愛とインセストを想わせる

イメージが漂う。まず夫人はファブリスの母のイメージをたたえる。毒殺されそうなファブリスを救いたい彼女は新大公に願う—「ファブリスをお助けくださいませ。そうすればなんでも信じます。きっと母親の心のばかげた取越し苦労でしょう（25)」。同時に彼女は一人の女として甥を愛するがゆえに「この眼で生れるのを見たファブリスと，恋をするという考えは，汚らわしかった(8)」と感じる。またファブリスも心底では夫人を愛する—「彼は実際公爵夫人をこの世のだれよりも愛していた〈really Fabrizio loved the Duchessa far above anyone else in the world〉(7)」。

作者スタンダールは意図的に義母と不倫を犯した公子とファブリスとを重ね合わせ「牢獄〈ファルネーゼ塔〉は，義母の愛人となったラヌッチオ・エルネスト2世の長子のために造られた（6)」とする。また夫人との仲を悩むファブリスのつぎの独白にもインセストとのかかわりがほのめかされる—「あまりはっきりした言葉は，近親相姦などという言葉と同じく，〈a too significant word as by an incestuous act〉彼女を身ぶるいさせるだろう（7)」。

谷崎の母への愛は，いわゆる母恋物—『母を恋ふる記』（大8〔6〕)，『吉野葛』（昭6〔13〕)，『少将滋幹の母』（昭24〔16〕）—にインセスト感情を措いてもじかにうかがえる。「乱菊物語」（昭5〔12〕）でも上総之介にとって胡蝶は母のイメージである。インセスト感情そのものについては，元来フェティシズム自体が母へのインセスト感情と不即不離ならば[14]それは谷崎作品に蔓延する次第となろう。すくなくとも『夢の浮橋』（昭24〔18〕）での主人公糺の実母は第二の母と置換可能で，後者と糺の間に母子のインセストを，いわば谷崎の願望の形で想定して自然であろう[15]。

Ⅲ　クレリア

谷崎の理想化する母は永遠女性であり，マリアと重なると述べたが，若いクレリアも聖母とともに主人公の母の像を示す。まずクレリアの美しさはファブリスにとって，地上のものではない〈he was enraptured by the heavenly

beauty of Clelia〉(15)。〈who could deny har a heavenly beauty?〉(26) 同時に彼女の貧しいものへの優しさは聖母の慈愛に等しい。年頃の娘の嫁ぎ先を憂える父のコンチ将軍は公爵夫人の瞳より娘の瞳が美しいと思う—「ことに，ごくたまですが，非情に深い表情をするときはそうです。しかし〔…〕誰が見てくれるでしょうか？　私と二人きりで〔…〕散歩していて，たとえば穢らわしい乞食を見てかわいそうだと思った〈lets herself be moved〉ときなんかに出すんですからな(15)」。

あわれな者に心を動かされるというのがクレリアの特徴であり，『パルムの僧院』では繰り返し彼女の哀れみ(pity)，憐憫がえがかれる。まず，逮捕されたファブリスは，馬車に乗ったクレリアに監房の近くですれ違い，以前コモ湖畔で会ったことを彼女に告げるが彼女は「深い憐憫，いやむしろ優しい感動から〈The profound pity, we might almost say the tender emotion〉いうべき言葉を見つけ(15)」られない。さらに独房がある塔への階段を昇るファブリスは彼女の瞳について感じる—「ずいぶんいろいろなことをいうような眼だ。何て深い憐憫だろう〈What profound pity!〉(15)」。また公爵夫人がその日夜会で会うクレリアの，「その眼差しには憐憫があった〈there was pity〉(15)」。同様に，牢獄の窓から主人公は眼下の彼女に会釈をすると相手もそっけなく会釈を返すが「眼を黙らすことはでき」ず「一瞬最も激しい憐憫〈the keenest pity.〉(18)」を表す。ついで入牢三日目の昼，憲兵に連れられ衛兵の屯所を出た折クレリアが投げた「優しい憐憫の眼差し〈that look of sweet pity (18)」をファブリスは思い出す。あと二カ所，クレリアがファブリスに覚える憐憫〈pity〉の描写があるが省略する。

ところでファブリスはクレリアが芝居見物のあと立ち寄るのを願い，彼女の屋敷近くの教会で説教をしようと企てる。その説教の趣旨は「たとえ相手が罪人であろうとも，慈愛の聖母〈Our Lady of Pity〉のために，寛大な魂の持主は不幸なものに憐憫を持たねばならぬ(27)」というもので「慈愛の聖母」が引き合いに出される。かつ実際の説教でも，「不幸な者の情熱的な描写が続き，地上においてみずからかくも苦しまれた慈愛の聖母を正しくうやまうため

には，不幸な者を憐まねばならぬと説いた。〈Next came the impassioned description of the unfortunate wretch whom one must pity, to honour worthily the Madonna della Pietà who, herself, had so greatly suffered when on earth〉〔…〕彼自身が憐れまれねばならぬ不幸な者とみえた。それほど彼は蒼ざめていた〈he had himself the air of the wretch whom one ought to pity, so extreme was his pallor〉(27)」とあり，クレリアが慈愛の聖母と重ねられ，ファブリスが彼女に哀れみを乞う形にスタンダールが仕立てていることは察せられよう[16]。

慈愛の聖母に加えてファブリスの母のイメージをもクレリアはおびる。牢獄長官の官邸の三階にはクレリアが餌をやる小鳥たちの鳥籠が置かれているが，ファブリスの牢獄も鳥籠にたとえられ，彼はクレリアが世話をする小鳥と重なるだろう—「突然彼の注意は恐ろしい物音によって現実にひきもどされた。かなり鳥籠に似ていて〈not unlike a cage〉，非情によく響く彼の檻は，激しくゆすぶられていた(18)」。さらにクレリアは縄を使って水とチョコレートを塔の牢獄にいるファブリスに引き上げさせるが(19)，やはり子供に食べ物を与える母のイメージとみなしうる。この綱は臍の緒を象徴するとの解釈もある[17]。

他方，彼女は気丈さをそなえる点で公爵夫人と似通い，翌日ファブリスが死ぬとの噂に「いっそ，あの勇敢なシャルロット・コルデ[18]のように大公を刺しに行こうかしら(18)」と勇敢である。また獄中のファブリス宛の手紙に脱獄を薦める彼女は「もし私の不注意から，公爵夫人の忠告をおしりぞけになるような感情をお持ちになったとすれば，私の不注意は永久に許すことはできません。繰り返し申し上げねばなりません，お逃げなさいませ，私があなたに命ずるのです〈I command you〉(20)」と言い，マリアであり母でありながらも一面勇敢で命令する強さをみせる[19]。

Ⅳ　ま　と　め

『パルムの僧院』の公爵夫人は高貴で気位が高く，一面背徳的で，男の首を欲し女主人として男の嗜虐性を満たし，母のイメージを備えフェティシズムや

インセストの対象となりうる女性であるが，谷崎の連想の中では永遠女性や聖母とつながらないではない。クレリアはあらかた聖母，永遠女性，母のイメージで，彼女もインセストの対象でありうる。谷崎は語り手による彼女たちの外面と内面の描写を経て，またファブリスやモスカやパラ，大公，新大公など登場する男たちの主観を通して彼女らを愛で，自己のマゾヒズム，フェティシズム，エディプス複合など，無意識に接する願望や嗜好を満たし，その濃密な体験が筋の緊密な組み立てという評価に至ったのでは，と推測される。

付記　本稿は日本比較文学会第41回関西大会（2005年11月）での口頭発表に加筆補正を施したものである。

註

1）以下〔…〕は引用者青木による省略を，／は原文での改行を表す。ただし引用文の両端にこれらは用いない。〈　〉内は邦語の場合は青木の補足，英文の場合は『パルムの僧院』英訳の邦語対応部分。谷崎については『愛読愛蔵版全集』（全30巻，中央公論社　昭和56年5月～58年11月）に拠ったが引用は原則として新字旧仮名とし，ルビを略し，繰り返し符号の「くの字点」と「ゝ」は用いず，同じ仮名を重ねた。なお片仮名ワ行のエの濁音はヴェで代用した。『パルムの僧院』の邦訳は新潮文庫　大岡昇平訳　昭和26年発行，引用は原本通り新字新仮名だがルビは略した。英訳は谷崎が読んだ *The Charterhouse of Parma*/prefaced by Balzac's study of Stendhal and his analysis of The charterhouse of Parma; translated by C. K. Scott Moncrieff. London: Chatto & Windus, 1926 に依拠した版（Toront: Clarke, Irwin, 1951 The new phoenix library: no. 11)。

2）『パルムの僧院』はスタンダールことアンリ・ベイルが，イタリアの古文書をもとに舞台を同時代のパルムに設けた作である。1838年の暮れ，55歳のスタンダールによりパリのコーマルタン街で口述された。便宜上梗概を述べれば，義理の叔父ピエトラネーラ伯爵の感化ゆえにナポレオン崇拝者となった青年ファブリスは，旧皇帝のエルバ島脱出を知り，旅券を偽りワーテルローに参じるが，兄によって官憲に訴えられ，ミラノ近郊の母の領地に身を潜める。ピエトラネーラ伯爵の未亡人でファブリスを愛する，ファブリスの叔母ジーナは，パルムの大臣モスカにミラノで出会って惚れられ，名義上サンセヴェリーナ公爵夫人としてパルム宮廷にデビューする。モスカの案で大司教となるべく，ファブリスはナポリの神学校で3年を過ごし僧正としてパルムに来たあと，叔母との仲を悩み女優を愛人にする。が，その夫におそわれ，逆に相手を殺してボローニャにいったんは逃げるものの逮捕される。パ

ルムの城塞に投獄された彼と，城塞長官の娘クレリアとに愛が生まれ，叔母の画策で脱獄した彼は恋人を慕って城塞に戻る。その後叔母の指図で革命家パラが大公を毒殺し，太子が新大公になる。ファブリスは叔母の犠牲で毒殺寸前釈放されて副司教の位を得る。貴族に嫁したクレリアは，聖母への誓いを守り闇の中でしかファブリスと逢わない。ファブリスは大司教となり，クレリアとの子供ができ，その子を拉致するが死なれ，クレリアをも亡くす。大司教職を辞しパルムの僧院に退いた彼は1年後に歿し，その叔母もほどなく逝き，モスカは富を築く。

3）〔　〕の中の数字は依拠した谷崎全集の巻号を示す。『パルムの僧院』については（　）内に該当する章の番号を示す。

4）主人公は原書では Fabrice，英訳では Fabrizio。

5）*La création chez Stendhal*, idées, Gallimard, p. 448

6）或作品を評価するうえで，谷崎が構成的美観だけを一貫して重視してはいなかったことは留意してよい。たとえば，「一体私は自分の性癖として，思想内容の深刻な芸術よりも官能的快味の豊饒な芸術を喜ぶ者である。〔…〕筋の統一，性格の鮮明などは，必ずしも私の要求する所ではない」（「芸術の設備に対する希望」『演劇画報』4月号　大2（大2は大正2年の略。作品の初出の年を示す。以後，明治，昭和も明，昭とし同様に用いる）〔22〕）と述べている。また「もともと支那の長編写実小説と云ふものは，日本の源氏物語などと同様，長いわりに事件のヤマや起伏や波瀾重畳と云ふことが少く，非常に多くの人間がただ物静かに彼方へ行き此方へ行きして似たような場面が幾度か繰り返されると云ふ，見やうに依つては随分退屈で，同じやうなことが繰り返されるところに，いかにも実際世界の縮図らしい感じがある（「きのふけふ」昭17〔14〕）」とも言う。

7）スタンダールのイタリアものと谷崎作品との比較を扱う先行研究は，その部分訳が谷崎によってなされたためか『カストロの尼』に焦点を当てた考察が多いが，以下，参照したものを挙げる。

吉田精一　1959　「谷崎文学と西欧文学」　『近代文学鑑賞講座9　谷崎潤一郎』角川書店

大岡昇平　1982　「『饒舌録』におけるスタンダール」　『谷崎潤一郎全集』10巻月報

平山城児　1983　考証『吉野葛』　研文出版

栗栖公正　1984　「谷崎潤一郎とスタンダール」　『ちくま』56号

千葉俊二　1992　「スタンダールと谷崎潤一郎」　『学燈』（のち『谷崎潤一郎狐とマゾヒズム』小沢書店）

山口政幸　1994　「昭和2年の谷崎潤一郎とスタンダール」　『受容と創造――比較文学の試み』宝文館出版

尾高修也　2001　「蓼食う虫」／「盲目物語」　『国文学解釈と鑑賞』6月

このうち『パルムの僧院』に関しては，まず創作方法について吉田論文の，谷崎の仮構の古書・古記録を設けたうえでの作品は語り口が『パルムの僧院』や『カストロの尼』のスタンダールのそれに似るとの見解，および千葉論文の，正史の裏面を扱う古記録の骨に自分の想像力で肉付けすることで現代性・普遍性・リアリティをそなえた魅力ある作品をつくる方法を谷崎はスタンダールから学んだが谷崎は仮構の古記録を用いた点でスタンダールとの時代差がみられる，との見解が注目される。個別的類似について千葉論文は，1．『盲目物語』で敵方スパイがお市の方を連れ出すよう三味線で弥市に合図するのが，ファブリスとクレリア，ファブリスと夫人との手文字やランプでのやり取りと，2．『春琴抄』での佐助の失明がファブリスとクレリアの闇の中での逢瀬と，3．『武州公秘話』で武州公の桔梗の方への献身がパラの夫人への献身と，4．『卍』の欺瞞に満ちた愛欲図がパルムの宮廷での陰謀とそれぞれ対応するという。1．については吉田論文が「暗号の解読」として指摘している。

8）「ございます」の「さ」はルビ「ママ」を省略している。

9）次のような美人の足への言及もある―「ラシが奇妙な平民的習慣を持っていたことはいっておく必要がある。たとえば議論が熟してくると，彼はよく足を組み靴を手に持った。〔…〕最も美しい町民の女の一人が，もっとも自分が非常に美しい脚を持っていることを承知の上であるが，冗談に司法大臣のこの典雅な態度の真似をしたとき，大公は大いに笑った。(24)」

10）聖母の記述は実話とみなしうる―「祖父は晩年に耶蘇を信じたか云ふ話で，〈祖父の〉写真の側には大きな金色の額縁の中に，マリヤの像が入れてあつた。それは立派な油絵のやうに覚えてゐるが，恐らく西洋の名画の複製だつたに違ひない。兎にも角にも，天を仰いで合掌して居る神々しい聖女の眸は，頑是ない当時の私にも不思議な威厳と畏れとを感じさせた。私はその像を見に行くのが好きでもあり気味悪くもあつた。今考へてみると，マリヤの像は2つあつて，1つは子供のイエスを抱へていたやうに思ふ。私にはその子供のある方の絵が一層不思議で，抱いてゐる聖女の，碧い眼をぢつと視てゐると，次第に云ひ知れぬ怯えを感じて，こそこと座敷を出てしまふのが常であつた」（「生まれた家」大10〔7〕）

11）谷崎は『陰翳礼讃』（昭8〔20〕）で肌に関し「日本人のはどんなに白くとも，白い中に微かな翳りがある」が，「われわれの先祖は〔…〕陰翳の世界を作り，その闇の奥に女人を籠らせて，それをこの世で一番色の白い人間と思い込んでゐたであらう」と考え，昔の女が眉を剃り，おはぐろを用いたのもそのためではと推量する。「若き日の母〔…〕はおはぐろをつけて，眉を落してゐたやうです。今日でも文楽の人形だとか〔…〕眉を落した女の顔をみてゐるとき，母親の顔なんかのことが潜在意識的に思ひ出される（「幼年の記憶」昭22〔23〕）」との連想とつなげれば，客観的には母の白さとは西洋人の白さではなかろう。しかし，『陰翳礼讃』で続け

て谷崎は青い紅を付けた女に関し「礼は，蘭灯のゆらめく蔭で若い女があの鬼火のやうな青い唇の間からときどき黒漆色の歯を光らせてほほ笑んでゐるさまを思ふと，それ以上の白い顔を考へることができない。すくなくとも私が脳裏に描く幻影の世界では，どんな白人の女の白さよりも白い。〔…〕一種人間離れのした白さだ」という。ならば，母の肌の白さも谷崎の主観にとっては，この人間離れした白さだとみなす余地がある。フェティシズムの観点からはマリアよりも母の白さが根源にあるといってよかろう。

12）『蓼喰ふ虫』（昭和3〔12〕）で，主人公は「この〈文楽〉人形の小春こそ日本人の伝統の中にある「永遠女性」のおもかげではないのか」と自問し，かつ「お久の何処やらに小春の共通なもののあるの」を感じ，昔風の家並みを目に，「ああ云ふ暗い家の奥の暖簾のかげで日を暮らしてゐた昔の人の面ざし」にお久を重ねる。註11）の引用から察知しうるように，谷崎の母も文楽人形を想わせる昔の人であって，この面からも永遠女性と連なるだろう。

13）細江光『谷崎潤一郎　深層のレトリック』（和泉書院　2004）141頁参照。

14）フロイト「フェティシズム」（『エロス論集』ちくま学芸文庫　1997）。「附衛過程における自我分裂」（『フロイト全集　第22巻』岩波書店　2007）参照。

15）秦恒平「谷崎潤一郎」（筑摩叢書　1989）72頁以下参照。

16）谷崎の聖母の特性もまずは慈愛と憐憫である―「祖父の信仰はニコライ教会派に属するもので，〔…〕子供の私はさう云ふ面倒ないきさつは知らず，ニコライ派のことなども分つてはゐなかつたけれども，赤ん坊の基督を抱いたマリアの姿を見ると，朝夕祖母たちが拝んでゐる仏壇の前に立つのとは違ふ森厳さに打たれて，深い慈愛と憐憫の籠つたその眼差を，云ひ知れぬ敬虔な気持で視詰めながらいつまでも傍を去ることが出来なかつた。私には，西洋の国の女神の前に掌を合はす祖父の心持がぼんやりと理解出来て，何となく薄気味が悪くもあつた半面に，自分もいつか祖父のやうになるのではないかと云ふ風にも感じた（『幼少時代』昭30〔17〕）」。

17）André, R.,*Ecriture et Pulsion dans le Roman stendhalien*, Klincksieck, 1977, p. 69.

18）大革命時代マラーを浴室でさした女性〈大岡註による〉

19）註10），註16）での引用にみられるがごとく，谷崎は聖母像に対し慈愛と憐憫とともに怯えや気味悪さをも感じている。これは谷崎の母親像がおびる両義性とパラレルであろう。この両義性は，たとえば『母を恋ふる記』（大8〔6〕）において，母を象徴する新内流しを主人公は「般若顔」ではとかんぐり，月光を浴びた美女の厚化粧に「神秘的な，魔物のやうな物凄さ」を覚える点，また『少将滋幹の母』（昭24〔16〕）での少将と母の再会において，慈幹が母を「魔物めく夕桜の妖精」とまずは疑う点などに表出されている。クレリアの勇敢さとファブリスへの命令口調とが侯爵夫人の攻撃性と高慢さとに近接すること，また逆に侯爵夫人が聖母，永

遠女性と間接的に通じうることとこの母親像の両義性とは矛盾しない。

参考文献（本文で言及したものを除く）

『谷崎潤一郎読本』　（『文藝』臨時増刊）　1956
「谷崎文学の本質」　高田瑞穂　（『國文学』）　1964　4
『伝記谷崎潤一郎』　野村尚吾　六興出版　1972
『谷崎潤一郎論』　野口武彦　中央公論社　1973
『谷崎潤一郎』　（『シンポジウム日本文学16』）　野口武彦司会　学生社　1976
『谷崎潤一郎の文学』（増訂版）　橋本芳一郎　桜楓社　1976
『谷崎潤一郎　耽美の構図』　（『国文学　解釈と鑑賞』　1976（10月））　至文堂
『文藝読本　谷崎潤一郎』　河出書房新社　1977
『谷崎潤一郎　美とエロスの航跡』　（『國文学』　1978（８月））　学燈社
『谷崎潤一郎』　千葉俊二編　角川書店　（『鑑賞日本現代文学　８』）　1982
『谷崎潤一郎論』　中村光夫　日本図書センター　1984
『仮面の谷崎潤一郎』　大谷晃一　大阪創元社　1984
『谷崎潤一郎　小説の構造』　遠藤祐　明治書院　1987
『谷崎潤一郎試論　母性への視点』　永栄啓伸　有精堂　1988
『谷崎潤一郎』　秦恒平　筑摩書房（筑摩叢書）　1989
『谷崎潤一郎　物語の方法』　千葉俊二編　有精堂出版　1990
『谷崎潤一郎』　谷崎昭夫他　小学館　（『群像日本の作家　８』）　1991
『谷崎潤一郎　伏流する物語』　永栄啓伸　双文社出版　1992
『谷崎潤一郎　擬態の誘惑』　渡辺直己　新潮社　1992
『谷崎潤一郎　問題としてのテクスト』　『國文学』　1993（12月）　学燈社
『形の饗宴　―谷崎潤一郎論―』　大石修平　『感情の歴史』　有精堂　1993
『谷崎文学と肯定の欲望』　河野多恵子　（『河野多恵子全集』第９巻）　新潮社　1995
『谷崎潤一郎国際シンポジウム』　アドリアーナ・ボスカロ編　中央公論社　1997
『評伝谷崎潤一郎』　永栄啓伸　和泉書院　1997
仏訳『谷崎作品Ⅰ』　1997　『谷崎作品Ⅱ』　1998　プレイヤッド叢書　各巻末注
『つれなかれせばなかなかに』　瀬戸内寂聴　中央公論新社　（中公文庫）　1999
『谷崎潤一郎　物語の生成』　前田久徳　洋々社　2000
『谷崎潤一郎　自己劇化の文学』　明里千草　和泉書院　2001
『谷崎潤一郎＝渡辺千萬子往復書簡』　谷崎潤一郎　渡辺千萬子　中央公論新社　2001
『われよりほかに　谷崎潤一郎最後の十二年』　伊吹和子　講談社（文芸文庫）　2001
『谷崎潤一郎必携』　千葉俊二編　學燈社　別冊『國文学』　2001
『谷崎潤一郎と世紀末』　松村昌家編　思文閣出版　2002
『祖父谷崎潤一郎』　渡辺たをり　中央公論新社（中公文庫）　2003

『谷崎潤一郎と異国の言語』　野崎歓　人文書院　2003
『特集　谷崎潤一郎』　（『ユリイカ』）　2003（5月）　青土社
『谷崎潤一郎　人と文学』　山口政幸　勉誠出版　2004
『谷崎潤一郎　書誌研究文献目録』　永栄啓伸・山口政幸　勉誠出版　2004
『谷崎潤一郎伝　堂々たる人生』　小谷野敦　中央公論新社　2006